

その3

丑 牛 ～うしなわれぬ英雄たち～

この牛は、天角地眼一黒鹿頭耳小齒違(てんかく・ちがん・いっこく・ろくとう・じしょう・はちごう)これは牛の誉め言葉。角、目、色、頭の形、小さい耳、齒の並びといった条件が揃えば 最大の賛辞。飼い主が喜ぶはずと父親に教わり与太郎は新居訪問。大黒柱の節穴を見つけ秋葉神社のお札を張ると火の用心になると、教わった通りいって、お小遣いにありつく。しかし漢字ばかりの「牛ほめ」ことばを忘れ、牛の尻に秋葉様のお札を貼れと罰(ばち)あたりな発言。主人がなぜ？と聞けば「屁(へ)の用心」!!上方落語の面白さ。

文楽や歌舞伎の「菅原伝授手習鑑(すがわらでんじゅてならいかみ)」では三場面も牛が登場する。「加茂堤」「車引」「天拝山(てんぱいざん)」菅原道真左遷の不運と梅王、松王、桜丸、三つ子の活躍を描く。左遷の原因は桜丸夫婦が仲立ちした帝の弟宮と道真の養女の恋。娘を利用して帝の外戚になろうという野心だと責められ失脚。「加茂堤」での、ふたりの逢引き場所が牛車の中。睦言を漏れ聞いた桜丸夫妻が身もだえすると牛が「モー」と鳴き笑わせる。「車引」では道真を罪に陥れた藤原時平(しへい)の乗り物が牛車。梅王、桜丸が止めて、車を破壊し、時平を怒らせるふたり。「天拝山」は太宰府に左遷された道真の憤死場面。人形では口から火を噴く演出で時平を呪い、天神・雷神となる場面。道真は牛の背中に乗っている。道真を祀った天神様の境内には「臥牛(がぎゅう)」があることも有名。なぜ？道真は丑年生まれとか。



狂言「木六駄(きろくだ)」は12頭も牛が登場。狂言はことばと身振りですべてを表現。雪道で12頭も引き連れている様子を想像させる。背中には、薪と炭を六駄づつ。雪の峠で土産の酒を茶店の亭主と飲んでしまい、荷物を半分残し、炭六頭分だけ届ける。手紙に荷の内容が書いてあり、薪六頭分はどこにあるか追及される。いえ、その木(薪)六駄は間違いで「きろくだ」というのは、改名した私の名前だと抗弁。寒い旅路の酒の勢いからきたこじつけ話。

もっとも古典芸能で一番人気の「うし」は「牛若丸」その母が名前にちなみ「丑三つ時」に平家調伏を願う「一条大蔵譚(いちじょうおおくらものがたり)」、

三味線音楽、浄瑠璃の語源は牛若と「浄瑠璃姫」との恋物語から。

能「鞍馬天狗」は孤独な少年、牛若に寄り添う天狗の美談。

長唄「五条橋」は説明不要。

現在の大河ドラマの義経像はなぜ兄に嫌われ、梶原が讒訴(ざんそ)するかがよくわかる、鶴越とは別の山からで牛の角に松明をつけて蹴落としたと三谷幸喜脚本。牛若成長後は毀誉褒貶ながら永遠のヒーローは今も健在である。

